

令和 8 年度第 1 回 柏市アフタースクール事業運営評価懇談会
会議録

1 開催日時

令和 8 年 8 月 7 日（金） 13 時 30 分から 16 時 30 分まで

2 開催場所

柏市役所 沼南庁舎 5 階 大会議室

3 出席者

(1) 委員

土井座長，福田副座長，木村委員，佐藤委員，山口委員

※五味田委員は所要により欠席

(2) 事務局

宮本生涯学習部長，田所アフタースクール課長、同課職員 3 名

※オブザーバーとして学校教育部学校教育課職員 2 名が参加

4 傍聴者の有無

有（1 名）

5 開会

6 あいさつ（生涯学習部長）

宮本生涯部長

7 委員及び事務局紹介

司会より，委員及び事務局の紹介

8 座長・副座長の選出

座長を土井委員，副座長を福田委員として選出

9 議事

事務局より会議資料次第のとおり、以下の内容を一括して説明

- (1) 柏市アフタースクール事業運営評価懇談会設置目的及び今後のスケジュールについて
- (2) 「高小すまいる」実績報告について
- (3) 柏市アフタースクール事業の運営状況について
- (4) 評価項目及び評価基準について

10 質疑応答

(土井座長)

高小すまいるやアフタースクールの実際の様子を福田副座長よりお話しいただきたい。

(福田副座長)

高小すまいるでの実績を踏まえ、本格的なアフタースクールが開始された。当初は不安もあったが、事業者や現場リーダーと協議を重ねながら、円滑に進めることができています。体験プログラムについては、多種多様なものがあり、児童にとっては「ただ保護者を待つ」だけではなく、より良い時間を過ごせるようになったと感じている。高小すまいるについては、限られた教室数しか貸し出しができず、部屋が過密になってしまう状況があったが、一方で児童の楽しそうな様子が見受けられた。

(山口委員)

「高小すまいる」という名称はどのように決められたのか。

(事務局)

子どもたちからのアンケートで決定した。

(山口委員)

「こどもルーム」という呼び方も柏市独自であると認識している。アフタースクールにも高小すまいるのように愛称をつけられると徐々に浸透していくと思う。

(事務局)

今はアフタースクールと呼んでいるがいずれは愛称のようなものをつけられたら良いと考えている。

(佐藤委員)

会議資料に高小すまいるのアンケート結果があるが、アフタースクールでは退所時間を間違える等、現場の情報共有ができていない事案が見られた。こうした意見も吸い上げられているのか。評価項目を検討するうえで安全・安心な運営をどう考えているか。
(事務局)

アフタースクールの運営にあたっては、開始当初、対応が円滑に進まない場面も見られた。特に、拠点数の増加に伴い、指導員による児童の引率という新たな業務が加わったことから、登退所管理についても、円滑に対応できないこともあった。現在は、登退所の管理について、専用のアプリケーションへの保護者による入力を基本としつつ、入力漏れ等があった場合には、現場の指導員から保護者へ速やかに連絡し、登退所の状況を確認する等、管理を徹底している。

(福田副座長)

保護者から学校へ「今日はルームを休みます」と連絡が入ることもあった。保護者の中には、アフタースクールを学校の延長と捉える方もいることから、今後もアフタースクールとの連携を密にし、保護者への周知を図っていきたい。

(土井座長)

議事(3)柏市アフタースクール事業の運営状況について質疑があるか。

(山口委員)

体験プログラムは子どもが選ぶことができるのか。

(事務局)

事前に専用のアプリケーションで申し込みを行っていただく。原則として、子どもの意向を尊重して応募するよう周知しているが、保護者の思いが反映されてしまうケースもあると認識している。

今後は、子どもたちが主体性を持って体験プログラムを選択できるよう「こども会議」等を実施し、子どもの意見を集約していきたい。

(木村委員)

高小すまいるの体験プログラムを視察させていただいた際に、

「あの子が行かないから行かない」，「あの子が行くから行きたい」等と話している子ども達があり，子どもの思いを直に感じることができた。

（事務局）

他の自治体では，体験プログラムに参加するために保護者へ費用の負担をさせているところもある。

（土井座長）

週４回の多種多様な体験は素晴らしいことであるが，多いことが必ずしも子どもたちにとって良いことなのか。与えられたことしかやらなくなってしまうのではないか。低学年が多い中で，体験プログラム目当ての参加者が増え，「体験プログラムがつまらないから行かない」という本来の「居場所づくり」という趣旨と離れてしまう可能性もあるかもしれない。

（福田副座長）

高小すまいるでは，体験プログラムの種類が多いほど参加児童が増加し，児童にとって選択肢の幅が広がるとの意見があった。

また，ボールを使用した体験プログラムは特に人気が高い。近年，公園等の公共の場では，ボールを使用した遊びが制限される場合もあることから，放課後に安心してボール遊びができる機会を提供することは，意義のあることだと考える。

（土井座長）

体育館は空調設備が設置されているのか。

（事務局）

全校設置されている。

（土井座長）

続いて，（４）評価項目及び評価基準について質疑はあるか。

（佐藤委員）

評価項目と本事業の目的達成とどのような関係性があるのか。評価項目の根拠を知りたい。

（事務局）

評価項目については，事業者を公募した際の仕様書に基づいて案を作成している。事業者が仕様書どおりにアフタースクールを運営できているか評価してもらいたい。未達成の部分があれば改

善を求めて行く。

（佐藤委員）

評価結果について、客観性、公平性を確保したいとあるが、委員の主観やノイズが入ることが懸念される。委員の評価結果をどのように分析していくことを想定しているのか。

（事務局）

事業が始まったばかりということもあり、まずは仕様書の内容を達成できているのかを評価していただきたい。

（山口委員）

評価項目の「異年齢の関わりがあるか」は必要なのか。

（土井座長）

アフタースクール事業はこれまでと違い、希望するすべての児童の居場所を確保すると定義している。低学年の利用が多い中で、体験プログラムや室内遊びを考えたときに、地域や学校の特色にもよるが高学年と関わった方が良い場合があるかもしれない。そのため、評価項目として残しておくことが望ましいのではないか。

（木村委員）

高小すまいるを視察した際に、体験プログラムの時間以外の時間に、低学年と高学年が一緒に遊んでいる様子を多く見かけた。年齢関係なく、子ども同士で好きな遊びをしている印象であったため、項目として残すことは差し支えないのではないかと考える。

（土井座長）

事務局はどう考えているか。

（事務局）

高学年が低学年に遊びを教える場面もあるため、項目として記載させていただいた。

（土井座長）

将来的には、低学年に対し、高学年が体験プログラムの講師になるようなことがあるかもしれない。

（山口委員）

自由時間は異年齢の交流があっても良いと思うが、球技等の体験プログラムを同時に実施すると、力や体格の差で怪我につながる恐れもあるのではないか。

(事務局)

ご意見のとおり、体験プログラムに関しては、怪我の防止等の観点から、学年に配慮した体験機会を提供するよう事業者と協議している。

(木村委員)

去年のプラン委員会では、評価基準を３段階にすると評価が中間に集中してしまう懸念があると意見があったが、どのように考えているのか。

(事務局)

そのようなご意見も踏まえ、今回の現場視察を通じてさまざまなご意見を伺い、今後の評価項目を確定ができればと考えている。

(土井座長)

時間の関係上質疑応答は以上とします。

1 1 現場視察（松葉第二小学校）

1 5 時 0 0 分	松葉第二小学校到着
1 5 時 0 5 分	～ 第 1 保育室にて保育現場視察
1 5 時 2 0 分	～ 第 2 保育室にて体験プログラム視察
1 5 時 3 5 分	～ 体育館の保育現場視察
1 6 時 0 0 分	～ 視察終了
1 6 時 3 0 分	沼南庁舎到着 解散

1 2 閉会

※次回開催予定令和 9 年 2 月頃